（前回まで）

この年、全国各地は多くの天災に見舞われた。数年来その活動を続けていた浅間山の噴火をはじめ、度重なる洪水、地震、疫病、飢饉等の災禍のために、数多の犠牲者、餓死者を出した。その中で、あやうく死をまぬがれ得た人々も、多くは田畑、家屋、家族を失って流民と化し、地をさ迷った果てに行倒れ人として路頭の累々たる屍の一つに帰す例も少くはなかった。

また、これら犠牲者の多くは、百姓ら生産者層であった。ことに貧しい人々の層に犠牲者がより多かったことは、それが天災という事情によるにしても、封建社会の成立基盤を断ち割ってその根を如実に見せられるごとくであって、この百姓の犠牲及び田畑をはじめとする各地の罹災は、封建社会の特権階級たる武士の経済に直接年貢という形で影響を及ぼすものであってみれば、諸藩、中央幕府の財政といえども、これによって危機に陥らざるを得ないのであった。

日置藩においても、その例外ではなく、むしろ以前より窮乏財政を続けてきたうえに、先の幼君**国千代**の不幸、重ねて**望月藩**からの養子縁組等における出費によって、家中武士の禄を半減するまでに財政は緊迫し、御用商人からの多額の借財もあるうえに、新たな借金の必要さえ強まっているのであった。

年貢米の減収は、そのまま個々の武士の禄米の減収につながるものである。すでに収納した禄米を担保に蔵屋から金を借りている者にとっては、今後の担保さえ断絶させることになる。事実、日置藩江戸表では、積年の借財のうえにさらに御用商人**弓屋**から借財しようとしたところ拒まれて、逆に〝お断り〟の暴力で過去の債権を一方的に無視したことによって、商人の仲間との間に悶着を起こすまでに追いつめられたのであった。

この陰に**七兵衛**の動きがあったのはもちろんである。彼はすでに大商人、三井の**越後屋**にまでその勢力を認められるに至っていたが、蔵元、掛屋、両替、問屋衆の中でも中心的なこの三井越後屋と連絡をもつことによって、彼はさらに既存の**菱垣廻船**に対抗して樽廻船のルートを設けるなどますますその勢力を拡げていった。言うまでもないが、七兵衛のこの原動力は、金の力によって自由を獲得するという夢であった。金の力で権力をも無力化させるという野望であった。

しかし、この七兵衛のもとで彼の忠実な手足となって働きながらも、**赤目**が七兵衛に批判的なのは、七兵衛の行動が権力者にとって抑圧された自由への復権の闘争の側面をもちながらも、夢の追求の手段として金への執着、偏重が行なわれることによって、もう一方に利己的側面の付帯するそのことについてである。その点に赤目は、七兵衛との内面の差を自身に認めているし、また赤目のその姿勢は、**夢々道人**としての彼の行動に証明されもする。

日置藩に対する七兵衛の商策も一つの大きな壁にぶつかる。すきがあれば外様大名の取り潰しを狙っている幕府が、日置藩に目をつけて隠密まで放ちながら、秘め持った謎を解けずに手を下しかねていることである。赤目を通じて得た情報は、日置藩に何やかやと普請の手伝いを命じて自滅させようとの幕府老中の意向であった。また、この赤目の忍んだ江戸城深くの同じ屋根裏に**カムイ**も身をひそめていたことは、彼の行動の先にあるものを朧げながら予測できなくはない。が、いずれにしてもこの秘密が解けぬ限り、あるいは藩自体が自滅の方向を辿らぬ限り、日置藩は**闇太郎**の幻君暗殺の結果に見られたように、潰滅にまでは至らぬであろう。そのことを知ったからこそカムイは、大火にまぎれて領主**日置弾正**を暗殺しようとした**竜之進**と一角とを、彼が止めに入らなければあるいは貫かれたかもしれないそのどたん場で二人の刀から敢えて領主を救ったのであったろう。

いま、幕府の転覆を図ろうとする組織に連座している**剣風**。剣に憑かれ、やがてスランプに陥り、そしてようやくそのスランプからの脱出口を見出したかのようにみえる**右近**。また、**隼人**をもカムイの変装と知り、彼を追い求める**サエサ**。……これらの群像を包んで、江戸大火の炎は夜空を突いて炎々と燃えあがる。

月刊漫画 **ガロ** 二月号 目次

表紙絵・**白土三平**

赤目

白土三平著

残酷は　血の鮮明さをもたない。むしろそれは　ひとつの血がさらに別の血を呼ぶときの気孔と気孔とを結んで横たわる　永く　底ふかい暗黒の世界にこそあるものなのだ。
大河作品〝忍者武芸帳〟〝カムイ伝〟に比肩される傑作長篇！

全国書店発売中　定価二四〇円

真田剣流（全三巻）　定価各二四〇円

剣風記　定価　二四〇円

コダマプレス
東京都中野区本町通3−24
ダイヤモンドコミクス

白土三平著

忍者武芸帳

影丸伝

全十二巻
旧版（17巻）全巻収容

漫画が小説を凌いだのか
小説が文字を不用にしたのか
まぼろしのベスト・セラーといわれながら　久しく読者に待たれていた傑作大河漫画

各新聞・雑誌で絶賛・激賞!!

第1巻　風雲の巻
第2巻　動乱の巻
第3巻　陰　の　巻
第4巻　怒濤の巻
第5巻　地変の巻
第6巻　変幻の巻
第7巻　影一族の巻㈠
第8巻　影一族の巻㈡
第9巻　群狼の巻
第10巻　流砂の巻㈠
第11巻　流砂の巻㈡
第12巻　風塵の巻

定価　二三〇円・二四〇円

全巻完結！

小学館
ゴールデンコミックス

つづく　　（禁転用転載）　　1966月10月2日　カムイ伝㉖完

（後記）

少数の武士が、多くの農民を支配し搾取する封建社会の根本的矛盾は、人々の夢を奪い、自由を圧しつぶした。だが、人々は、自然との対決の中で、又、闘い得た自由の平等な分配のために闘い続けた。

それは、百姓**正助**、非人**カムイ**、**ナナ**、**夢の七兵衛**、**苔丸**、**竜之進**、それぞれ、事情、目的はさまざまであっても、一つの夢に向かって、迷い、悩みながら驀進していた。それは、ぶつかる壁が封建支配という一つの障壁であることによっても証明されている。

だが、個人の自由、自己の解放も、互いに関係し合い左右する社会というものに対して、自己のみを切り離して考え得るしかない時代にあっては、たとえ、その夢に近づき得たとしても、それはエゴイズムの世界へと落ちこまざるを得ない。

資本主義社会の維持を保証するものは、市場の獲得にある。とうぜん国内に限界がくれば、国外へと目が向けられる。そして、侵略戦争が起きる。

どのような美名、口実を設けても資本主義国の関係する戦争の本質は、侵略であり、市場の獲得であり、その地域の人々を支配することを目的とする。そのために手段を選ばなかったことは、数々の過去の又現在行なわれている戦争の記録が示している。つまり、これが、個人主義のなれの果てであり、自由主義諸国と言われているものの正体である。

夢の七兵衛は、武士に対抗し、金の力でおのれの夢を追求するとき、ある一方にひずみを生じせしめることになる。**赤目**が指摘したように、もし明暦の大火が自然におこらなかった場合の放火計画の指摘も、七兵衛的夢の追求のケースにおいての結末として肯定できなくはない。

又、竜之進らの仇討に関しての方法も、百姓達がおのれらの産まれくる子供を殺さなければならなかった結果を認めなければならないだろう。

カムイにしても、非人故に忍びとなったとはいえ、先輩赤目が前例を示したように、しかも、またとない奇蹟に近い条件のもとに実行した抜忍による自己の解放も、他を犠牲にしてのものであったことはすでに紹介されている。

だが、人々は、おのれの夢をどこまでも追い求めるものであるし、諦めた者は、敗残者である。そして、人間社会の発展も、又、歴史をも否定したことになる。

おそらく、カムイは、おのれの忍びの限界をとうぜん悟るだろうし、抜忍としての道をとらざるを得ないだろう。しかも、この道は、追手を逃れ、これを殺すことによってしか得られない道なのだ。

又、正助とナナの愛、苔丸のいう世直しも、封建制度という階級社会を根底から覆えさぬかぎり得られないことは明らかである。

だが彼らは、新田を開発し、商品作物の栽培を計画し、他との、市場とのつながりによって、百姓の生活を豊かにする闘いの中で、領主権力に対決して行こうとしている。そして、ナナはその中で正助の子を生んだのである。生まれたものは生きていく。そして夢を追求して行くだろう。

怒れはばたけ〝原宿族〟

吉沢明子

お猿さんはらっきょうを与えられると、あのうす白い皮を一枚一枚はいでいって、とうとうらっきょうの形もなにもないようにしてしまうそうだ。私はまだ一回もその現場をみたことがないので、いつか逐一、その様子をみたいものだと思っていた。お猿さんはらっきょうの皮をはいでゆけば必ずあのおいしい木の実のように、実のしんにつきあたると信じているにちがいない。ところが、らっきょうは、どこがしんで、どこが皮か、わからないようなところ、そのものの中に、らっきょうのしんや実の全体があるのだ。

ところで、先頃からマスコミは〝原宿族〟という名の若者たちをつくり出して、その実体を追いもとめるのに忙しいらしいが、その様子は、どうやら、先のらっきょうの場合によく似ている。

話は少しちがってくるけれども、十一月十五日の「小川宏ショー」で、〝原宿族〟代表とされた若者数人と、原宿族追放を求める数十人原宿の住民代表（良識あるおばさま方やツメエリ姿の学生）とが、口論しているのを見た。

若者たちは、我らは原宿〝好き〟の元祖なのであって、後から入ってきて、騒音や〝ロングキッス〟をしている連中たちとはわけがちがうといい、いい意味での個人主義者なのだと主張する。そして〝人に迷惑をかける悪い原宿族〟たちはほんの一にぎりなのであって、自分たちとは違うと、〝悪〟い若者たちを差別する。

一方、山のようにがっちり固まった住民代表達は、人々に迷惑をかけるようなことはするな、我々は決して無理をいっているのではない、倫理を守れといっているのだ、という。そして中年の婦人が、メガネの奥に目を光らせて、あなた方は自分のことばかり考えているようだけれど、私たちは天下国家のことを考えているのよ、というに至って両者は全く共通の言葉をなくしてしまったかのように見えた。

そして形勢は全く若者たちに不利だった。何故なら彼らは責められる立場にあり、その上に、相手のペースに全くのせられてしまっていたのだから。

若者達は、住民達の主張する良識、倫理の中にあるエゴイズムに気づかない。それというのも、彼らを責める住民達の被害者ぶりが、板についているからだ。良識ある住民などというものは、自分がエゴイストだなどとは思わないで、いつも人の良い優しげな様子をしている。更に問題なのは、若者たち自身がその良識や倫理によりかかっていることなのである。彼らは自分達がその倫理を犯していないと主張することによって、仲間を裏切り、その上自分達の行動の中にあったかもしれない自由の可能性をも踏み潰してしまったのだ。相手側の論理、倫理をのりこえるためには、自分達の行動を論理化する必要があったのに。

●読者サロン

「カムイ伝」から学ぶもの

「カムイ伝」について唯物史観云々される方があるが、それはとんでもないことであろう。「カムイ伝」は歴史観を描いたものではない。（作者・白土三平氏の歴史観が唯物史観だと言うのはかまわないが） さらに、「カムイ伝」から、歴史を学ぼうとされる方がある。これもまた愚である。「カムイ伝」は歴史そのものではなく、歴史漫画（むしろ劇画）であって、作者はそれを芸術の一ジャンルにまで高めたのだと思う。作者は歴史の中で前進していこうとしている人物の姿をあざやかに描いているのである。それゆえ、歴史を知る契機にはなる。その意味では、「カムイ伝」は大きな意義がある。とくに今日では、文部省の検定教科書のもとで勉強している中学生・高校生にとっては。それに今の段階で学校を出て、働いている人などにとっては。

「カムイ伝」の中で作者が最も訴えたいのは、ある時代の矛盾を自分達から進んで解決していこうということではなかろうか。そういった意味から、「ガロ」誌上で唯物史観論議をやっている人たち（多くは大学生のようだ）に、次の言葉を贈る。「哲学者は、世界をただいろいろに解釈しただけである。しかし、だいじなことは、それを変・革・す・る・ことである」（「フォイエルバッハに関するテーゼ」より）

皆さんの意見をおきかせ下さい。最後に、白土三平氏の活躍と「ガロ」の発展を祈る。

福岡市十軒屋47　**吉田　勉**（高校生）

最近の白土先生の漫画に感じること

私は白土先生の大ファンです。初期の作品からずっと愛読しています。今では先生の漫画だけで百五冊持っています。「カムイ伝」も初めから読んでいます。正直言って最近の先生の漫画は初期の作品に比べて面白くありません。特に「忍者武芸帳」のような漫画としての面白味が失くなったように思います。当時とはテーマもかなり変わって最近の先生の作品の全てを貫いているものは下忍の自覚であるように思います。必然的な歴史観の上にあるのでしょうが、それが歴史的発展と漫画としての面白味が矛盾した形で現れていると思われます。具体的に「カムイ伝」㉓の中で夢屋とクシロの対話などといった方がふさわしいようなスタティックな描写です。又、夢屋の描き方は前号迄は得体の知れない人間像として大変興味ありましたが今月号ではその夢も破られ俗物的扱い、それも大変ありきたりの描き方です。「忍者武芸帳」に於ける林崎甚助の階級を越えられぬ論理的な否定に於ける人間的悩みの描き方には遠く及ばない。即ち最近の作品ではかなり濃厚に論理的に高飛びしているが故に漫画としての面白味を欠いているように思うのです。絵という表現媒体を持ちながらセリフで処理する方法は非常に悲しいことです。最近のあわただしい社会問題をみていると誰もが気があせってくるのかも知れません。しかしその為に作品が解説になってもらっては困ります。こうした時にこそ私達はほんとうの芸術を求めます。先生が作品以外の場でいかなる行動をされようとも、私はその時点から先生の作品を評価することは避けたいと思います。私は何よりも先生が神話的になることを恐れます。忍者が技に賭けたように、先生は漫画に賭けて欲しいし、私は作品にのみ賭けたいと思います。先生の今後の作品に期待致します。　待

大阪市北区中崎町141三晴荘　**上舘尚美**

幻想のカラクリ

――建国記念日制定について――

上野昂志

緑魔子という女優を私は支持している、と書くと、いかにも奇妙な感じがする。選挙の候補者でもあるまいし、支持するとは何事だと非難する声が聞こえるようである。好きなら好きと言ってしまえといわれそうでもある。しかし、好きとか嫌いとかは、個人に対していわれる言葉である。私は不幸にして緑魔子を知らない。ただ、緑魔子という名でスクリーンに登場する姿に、暗闇からひそかな拍手を送るだけである。俳優とは架空の存在である。それは時に夢であり希望であるが、等しく時代の幻想が産みだしたものにすぎない。映画館のひとすじの光の中に浮かびでるその姿は、時代をあざやかに反照している。私が緑魔子の姿に心魅かれるのもそのためである。彼女は根なし草である。家もなく、故郷もないといった彼女の風情に、私は現代の象徴を見る。(象徴というのは何処か別の所にもいるという話を聞いたが……)ところが、彼女を根なし草と見る点では私と一致しながら、そのことを批判する人もいる。筆者が誰かは忘れてしまったが、その内容は、緑魔子の紛する少女は、土着する根を持たないが故に、都会へ出てきても何も見ることはできないし、何もとらえることはできない。といったようなことだったかと思う。しかし、私は、この筆者に、二〇世紀最大の芸術であるジャズが、どうしてアフリカではなくてアメリカで創られたかについて頭をしぼってもらいたいと思う。それはアフリカのニグロ音楽がアメリカの文明社会の影響を受けてジャズに発展したんだなどということでは決してない。黒人たちは自分たちの故郷から根こぎにされることによって始めて、それまで無意識的にやっていた自分たちの音楽を意識的に客体としてとらえかえし、そこからジャズを創りだしたのだ。そこで重要なスプリングボードの役を果たしているのは、故郷との精神的なつながりではなくて、故郷からの決定的な断絶であったことはいうまでもない。それ故にジャズは、どこどこの音楽ではなくて、音楽そのものであり、しかもその方法において民衆的なのである。根こぎにされたものの前には二つの道がある。一つは、新しい有機体の中に自分を同化させ、そこで上昇していくことだが、もう一つは、それを契機としてかつての家や故郷を客体としてとらえなおすことである。私は、緑魔子の姿態の中に、新しい有機体への同化をも拒否された人間をみたのである。そして、そのような人間には家や故郷という共同体の幻想を対象化する可能性が開かれているのではあるまいか。

ところで、家や故郷との関係を客体化してとらえようという試みよりも、ノスタルジーと共に想いだしたり、ロマンチシズムから伝統を云々する傾向が一般的なようである。例えば、建国記念日の制定の問題についてもそうである。

「愛国心の押しつけは困るけれど、自分は『紀元節』という言葉は神代の昔のかおりがして好きだ」という二十三才の女性の言葉は、そのようなロマンチ

ックな気分をよく表している。自分の好みを表現したにすぎないこの言葉は重要である。「愛国心の押しつけは困る」と言うことで、自分以外のものが個人に犠牲を強要することはイヤだという拒否の姿勢を示し、「自分は『紀元節』という言葉は神代の昔のかおりがして好きだ」ということで、紀元節を自分の好みの中にとりこんでいる。そこに一貫しているのは、さすがに戦後派らしく、個人の利害、好みに執着する態度である。しかし、この言葉は、紀元節の復活、あるいは建国記念日の制定には役立つかもしれないが、「愛国心の押しつけ」を拒否する点では何の役にもたちはしない。国家は彼女の好みを吸収する。伝説だろうが、神話だろうが構いはしない。個人の好みに応じて、国家は、幻想のうちに「国の紀元」をさしだす。それにとって建国記念日などどんな形でもいい。自衛隊のパレードなどする必要はさらにない。ごく雅びやかな行事をする方がより効果的かもしれないのだ。青空に日の丸の旗が翻り、神社からはのどかな音楽が聞こえてくるような情景の中に、ロマンチシズムは吸収され転倒されて「愛国心の押しつけ」となって返ってくる。その時、「愛国心」は、自分のロマンチシズムとそっくりであるために、彼女はもはやそれを「愛国心の押しつけ」とは意識しない。紀元節を個人の好みのうちにとりこんだかに見える彼女の言葉は、そのまま国家の幻想の中にからめとられてしまう。しかもなお、彼女はそこに自分のロマンチックな夢が実現されたかのように思いこむ。このカラクリは、国家を国家たらしめるカラクリでもある。石川淳の秀作『八幡縁起』には、次のような言葉がある。

「国つくりはこれからぢや。打ちしたがへるべき山山は数かぎりない。行くところの地には、かならずやその地に古き神神はあらう。またその神神を深く信ずるやからがあらう。力なき神はとるにたらぬ。ひとに畏怖の念をいだかしめるほどの神ならば、取ってもってわが神とすべし。すなはち、その神を奉ずるやからのこころを取ると知れ。……」

このようにして、他の部族の神を自己のうちにとりこんでいくことによって、自己をすべての祖先として示そうとする。そして、

「わしの孫の、そのまた孫の、末の世におよんで、かの名なしの神、まことにわれらの国を護る神の一つとなりおほせたときには、名はもとめずともえられよう。じつは、そのときこそ、あてがはれた名に応じて、神体もまたおのづから入れかはることにもならうて。かの神を奉ずるやからについて申さば、おなじく孫のまた孫の、遠い裔に至っては、おのれのおろがむ神の本はおぼえず、名なしの神のむかしは知るよしもなくて、ただ末の世の神名を念じつつ、一類みなこの国の民として、われらの神につかへるほかあるまい。……」

この神話吸収の起源が忘れられた時、国家はそれ自身支配の最高形態でありながら、支配関係に先だつものとして理解される。そこに国家のカラクリがある。政治的支配の最大の力を振るいながら、しかもそれは郷土の山や川、あるいは体内を流れる血のように本源的なものとしてふるまう。この幻想があるからこそ、国家は人を内側からも支配できるほどである。建国記念日を制定するなどということも、その幻想の強いる行為である。二月十一日が歴史的事実として建国の日でないことは周知のことだが、だからといって、その日を記念日にしようという主張が弱まるなどと考えてはいけない。事実でないが故に、それは幻想の中により強く生きかえっているのだから。そして二月十一日以外の日を建国記念日にしようという案も、国家を国家たらしめる幻想にからめとられたままでの発想であることにおいて、変わりがない。私たちはいつ、この幻想を幻想としてとらえることができるのか。

（66年11月16日）